

「おばあちゃん、この頃、身体どうですか。仕事  
が忙しくて、おばあちゃんの顔を見られん日が、  
このところ続いたけど…。」

茶の間へはいると、新聞を読んでいた圭吾が、  
テーブルの向うから声をかけた。  
「え。ありがと。あんたも無理はいかんよ。仕事  
もほどほどにな。」

言いながら、露はゆつくりと茶をすすった。  
耳の中でも虫が鳴いている。リ、リ、リ、……。  
いつまでもやむことがない。

（また、耳鳴りが始まった…）  
そう思いつつ、露は黙っている。耳鳴りが始ま  
ると、ときどき、今、自分がどこにいるのかわか

「おばあちゃん……。」

「ありがとうなあ。信次さん。」

今度ははつきりと圭吾の顔を見て、露は言った。  
今、露の前にはいるのは信次であった。

このところ、露は以前よりも頻繁に信次と出会  
うようになっていた。

圭吾と話していると、いつも知らぬ間に、信次  
に変わってしまうのである。

そんな時の信次は、かつての傲岸な信次ではな  
かった。露をやさしく包みこんでくれる、大きく  
て、頼りがいのある男であった。  
信次が現われるのを、露は、心はずませて待つ

らなくなる。頭の中にみるみる霧がかかってく  
る。しかし、大たいそれはすぐ収まった。

「あ、そうそう。この間、萩へ出張した時、お  
ばあちゃんに、いい湯呑を買ってきたのに…。渡  
すのをすっかり忘れとったなあ。」

圭吾が立ち上がり、戸棚から小さな包みを取り  
出して開いた。

薄い銀ねずみ色に、白い釉薬の流れたあとが  
美しい萩焼であった。

「まあ、わたしへのおみやげ？」  
露は、手にとって湯呑を眺めた。

「ありがと。信次さん……。」  
咳くような声で礼を言った。

た。けれども、その信次は現われてもじき消えて  
しまい、やがて圭吾に戻るのだった。

圭吾と信次の間を、行きつ戻りつしながら、露  
は、近頃、幸せであった。

定年退官をしたら、一年間だけフランスへ行き、  
念願のフランス文学の研究に没頭してみたい、  
という圭吾の希望については、露も千枝も早くか  
ら納得していることであった。

一年間だけでどうなるというものではないが、  
長い年月、一つの組織の中で働き続けてきた  
圭吾に対するねぎらいの心もあって、むしろ  
積極的に賛成したのもであった。

圭吾は、高齢の母親から一年間にもせよ、遠ざかることを危惧した。だが、もともと健康な露であることが圭吾に必要以上の心配をさせなかった。最近、しばしば物ごとを混同するらしいのは、老人にありがちの症状だと圭吾も千枝も簡単に思いこんだ。

「母さん、くれぐれも気をつけて下さいよ。」

それでも、出発の前夜まで、なおも念を押す圭吾に、

「わたしは大丈夫。あんたこそ外国へ行くんやら十分に心せんとな。」

と露は逆に圭吾を気使って見せた。

昭和六十年十一月はじめ、圭吾は、フランス

へ向けて旅立って行った。

圭吾が発った夜は、さすがに露は眠れなかった。明日から圭吾のいない日々が、続くのだ、と思うだけで、寂寥感が露の全身を押し包んだ。圭吾が東京で大学生活を送った間だけは離れ住んだが、あとはいつもいっしょだった。特に、年を取ってからは、露にとつての圭吾は、文字通り、杖であり、柱だった。

夕方がくれば、圭吾が帰ってくる、と思うだけで露の心は安定していた。

その圭吾が、当分はこのうちへ戻ってこない。圭吾に会えない。顔も見られない。あのほのぼのとしたあたたかな笑顔にも接することができない。

そして……。

圭吾がいけないということは、あの信次にも、露は出会うことができないということなのであった。八十四歳の露に、考えも及ばなかった寂漠とした日々が訪れようとしていた。

露はまどろみから覚めた。初冬のおだやかな日ざしが障子に木々の影をうつすらとうつし出していた。

露は身体を起した。部屋を出た。廊下を歩いた。圭吾の部屋を見たいと思っただのだ。あそこには、圭吾の匂いが残っている……。

茶の間の方で、コトコトと音がしていた。圭吾の発ったあとの片づけで、千枝はこのところ慌

しい日々を送っていた。露は、千枝とゆっくり話をかわすことができなかった。

圭吾の書斎は廊下の途中にあった。八畳の和室に絨緞を敷き、大きな座机を入れて、圭吾は一人で使っていたのだ。

露は、障子ぎわに立って、部屋の内を眺めた。日がいつばいにさしこんで、室内には透き通るような明るさが満ちていた。

紙箱や布袋や紐がまだ雑然と散らかっているのは、千枝一人で、整理に手まどっているせいだろう。

机の前に置かれた大きな座布団を見ると、圭吾がどっしりと坐って書きものをしていた姿

がありありと見える。圭吾のふだん着のきもが、壁にかかっている。圭吾の着癖がそのままに残っていた。

露は、胸が痛くなるのを覚えた。

ふと、机の引出が少し抜けかかっているのが見えた。露は部屋にはいった。

引出をきちんとしめ直そうとしたが、奥の方でも絡まっているらしく、うまくしまらない。

しばらくゴトゴトゆすぶっているとやっと開いた。

再び閉めようとした露の眼に白い封筒が見えた。

大きな折り皺がついているところを見ると、これがひつかかっていたのだろう。

露は、封筒の皺を伸ばすように、指で撫でさす

った。と、封筒の中みの一部が、その口からぞいでいるのに気がついた。

露は指先で、そのものをそっと引き抜いてみた。

写真であった。若い女が写っていた。

相当古いらしく、写真は黄ばんで角が少し破れ

かけていた。露は眼を細めて、じっとその写真を見つめた。

どこかで見たことのある女であった。

はて、誰だったろう。古い記憶を露はたぐり寄せてみた。

突然……。露の頭の中で何かはじけとんだ。

思考が勝手にめまぐるしく廻りはじめた。その

思考についていけず、露は思わず畳に手をついた。

写真の女は、喜乃であった。喜乃がゆったりと

ほほえんでいた。

(いったい……どうして……)

露は混乱した。

喜乃の写真が、圭吾の机の中にあっただ。

その意味にようやく思い当った時、露は慄然とした。

喜乃は美しかった。モノトーンの写真の中

も喜乃のおやかさは十分に表現されていた。

濃いまつ毛のかげの愁いを帯びた眼が、露を見

ていた。二、三本のおくれ毛が頬にかかっ

ていた。二、三本のおくれ毛が頬にかかっ

ずっと遠い昔、女木で会った時の喜乃がそこ

にいた。

信次の愛を一人占めし、信次の子を生んだ喜乃。

五十九年もたっていないながら、まだ昔のままの

美貌で露の前に突如、現われた喜乃。

そして……。そして……。恐らくは長い年月、

圭吾の机の奥深く、大切に秘められていた圭吾

の母、喜乃であった。

露の中で、大きな音をたてて崩れるものがあつ

た。それは、露の脳を破壊しつくそうとするよう

に、容赦なく恐しい音をたて続けた。

その音は、確信を持って露が築き上げ、独占し

てきたはずの母親の座が崩れ去る音であった。

露の中の、ぬくもりに満ちた圭吾が死んで行く

音であつた。

圭吾の中の、やさしさに溢れた信次が死んで行く音であつた。

明るさに輝いていた部屋が、ずっと暗くなつた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

千枝は、ゆつくりと日記帳を閉じた。

長い日記を読んだ疲労が、千枝の全身を浸していた。

もう、春のあけぼのの色が、少しずつ窓の外に

広がりは始めている。

数十冊の日記帳の中にぎっしり詰まっているのは、露という一人の女の中に堆積している、

もろもろの修羅の重さであつた。

日記の中には、これまで見たことのなかつた、一糸まとわぬ裸の露がいた。露の呻きや、慟哭

や、切々とした息使いがどの行間からも生々しく聞こえていた。

それにしても、人間とは、何と哀しくて、いじ

らしい生きものであるうか。

人はみな、ひたむきに生きていくはずであつた。ところが、ひたむきであればある程、あらゆる方向

にそれて行く人生のあることを、千枝は今、思い知らされていた。

千枝の視野に、三十三年前の、ある夜の光景がまざまざとよみがえってきた。

(以上4月28日放送分)